

回復される失地

岡崎澄衛詩集『ひまぎの鬼』

伊良子正

いう。ひまぎの鬼、鬼の属性である赤裸のリア
 リデイーに魅せられる。『ひまぎの鬼』の
 四十五作品が訴えるものは、人間存在の獣性
 と神性の葛藤ともいえよう。両者のトラブル
 などと皮相な見解をいう卑俗な読み手は、所
 詮、岡崎世界には無縁の存在なのかも知れぬ。
 ところで、書評なる行為がいささかなりと
 も対象の核に蝕れようとするなら、書評子と
 著者の協和、不協和の両面から客観的にアポ
 ローチするのが責任ある態度であろう。また、
 好意的批評が、著者の可能性への強い願望ゆた
 におい、勢い注文が多くなるのも致し方ない。
 この詩集に對する二つの注文をしたい。そ
 の一つは、神性への信頼があまりにストリー
 トなため、卑俗ねな日常茶飯に低迷する読み手
 は低迷のままにとり残される。その二つは、
 発想表現上の断定がもたらすカタルミスへ淨